



宮ちゃんとミルの 恋愛話



キャンディやぶこ

好きな人ができました。

好きな人ができた。

その名は宮下さん。

恋ってある瞬間に
ズッ・・・キューン！って

落ちるもんなんだよね。

恋に落ちるとは
まさによくいったものだな～。

好きな人がほしい、
恋愛したい、なんて
いくら思っても
ダメ。

気がついたら
恋してた。
それが恋。

やめようと思っても
やめられない。

とまらない。
とめられない。

そんな気持ちを書いてみました。

私と宮下さんは

仲がいい。

一緒にラーメン食べに行ったり、

この間の

お休みの日は

USJにも行った。

夜中はずっと

携帯で

しゃべってるし、

これって

私たち・・・

つきあってる・・・て

言うのかな？

宮下さんは

私のこと、

ミルって

呼び捨てにしたり、

みーちゃんって

猫みたいに呼んだり、

ミルミルって

言ったり、

そうそう、

この間は

なぜかミルフィーユ、

なんて

ふざけて言ったり。

そんな毎日が

とても

楽しい

私です。

バイト先で知り合った

私と宮下さんは

バイト先で知り合った。

大学から2駅向こうにある
ハワイアンカフェ。

そこで
ロコモコを
真剣に作ってる宮下さんの姿に
見惚れてしまった。

私の視線に気づいたのか
「ん？」

宮下さんがふと
視線をあげて私を見た瞬間、

あ・・・私、この人好き。

と思った。

ハワイアンカフェ「マウイ」
は
非日常の世界。

宮下さんと
一緒に過ごせるからだけじゃない。

店内もリゾート気分満喫できる
雰囲気コーディネートされてる。

制服だって、アロハ。

このアロハシャツが
宮下さんは本当によく似合う。

フロア担当の女の子たちは
ムーニーをミニにアレンジした
フリフリスタイルに、
頭にハイビスカスつけちゃってる。

だから、
本当にこの仕事してると
楽しい。

それに、
マウイでは
お客さんを一番に考えてて、
精一杯のおもてなしをしよう、ていう
店長さんのコンセプト。

ひとつは
きてくださった
お客さんに
レイの花輪を
首にかけてあげるの。

はじめてきた
お客さんはすっごいビックリされるけど、
とても喜んでくれる。

で、レイはおみやげにそのまま
お持ち帰りしてもらってる。

だけど、
常連さんだと、

またミルちゃんにレイかけてもらいたいから。とか

もったいないから
預けとくよ。とかいわれちゃうので、

お店にはレイの花輪かけのフックがあって、
そこにお客さんの名前書いて
レイが並んでる。

そんなレイたちを
見てるだけでも
本当に幸せ。

お客さんに喜んでもらって、
そして
宮下さんにも会える。

こんな素敵なバイトで
そして
宮下さんに恋した私。

らーめんデート

はじめてのデートは

ラーメン食べに行った。

えっ？

あの、一見オサレな宮下さんがラーメン？

と思ったけど、

でも、そこがいい。

そんなミスマッチなところがいい。

でも、それは私の
単なる幻想だった。

ギトギトとんこつラーメンが好きな

チャーシューたっぷり、
背油チャツチャが
好きな肉食系男子なだけだった。

ほっとした気もした。

バイトが終わって

「ラーメン食べに行こ」ていわれて

びっくりした。

え・・・でも、宮下さんバイクじゃ・・・

「ちゃんとミルのメットも用意してるよ」

ほんとだ・・・

私のヘルメット・・・

それも新品。

ちゃんと買ってくれてた。

でも私実はバイクの免許持ってなくて

ヘルメットのかぶり方もよくわからなかった。

宮下さんが

キチンとあごの下をしめてくれた。

宮下さんの指が

時々あごの周辺にあたる。

さっきまで

マンゴーやパイナップルを

刻んでいた

手先。

ちょっぴりトロピカルなおいがして

ドキドキした。

バイクの後ろに乗るのは

憧れだった。

宮下さんの腰に手をまわして

走る。

ほら、見て見て！！

私の彼氏なの。

かっこいいでしょ！！

私は心の中で得意げだった。

萬金

着いたところは

萬金。

いかにもお金がたまりそうな名前のお店だ。

宮下さんはとんこつラーメンを

ふうふういいながら食べ

「やっぱラーメンはとんこつやな〜」

などといっている。

私はオーソドックスにしょうゆラーメンにした。

油のわっかがキラキラ光っている。

「でも、ほんとミルって
おいしそうにラーメン食べるよな〜

俺、ズルズルいいながら
ラーメン食う女って大好きなんだ」

・・・えっ？・・・

今・・・好き・・・って・・・？

でも、その前にズルズルいいながら・・・て
どうゆうこと。

私下品なのかしら・・・

「たまにさ、ラーメンの麺を1本1本食う女がいるだろ。

あれ、許せねーよな」

麺を1本1本・・・て・・・

そんな人いる・・・？

「そんな人ありえないよ～」

「いや、マジでいるんだよ。それがっ！！」

宮下さんは目をまんまるにして
こちらを向いた。

いや・・・おつゆが

2. 3滴・・・口の周りに飛び散ってますけど。。

でも、そこがまたいい。

ラーメンごときに必死になる宮下さん。

でも、マジで1本1本チマチマ食べるお方・・・て・・・

過去につきあってきた女の子？

それとも、たまたま一緒にラーメン食べただけの
お友達？

ちょっと気になったが

ラーメンごときで

いちいち詮索するのも大人げない。

「みそバタコーンラーメンってあるだろ。」

唐突に話題が変わった。

「えっ？何、それ」

「北海道いったときさ。

みそバタコーンラーメン、ってあったんだ」

「へ～」

私の反応のない答えに

宮下さんはまた目をまん丸にして

興奮した。

「みそにバターにコーンだよ！！

最強だろ、最強！！

牛丼の上に卵のつけて

さらに伊勢海老のっかってるようなもんだよ」

牛丼に伊勢海老？

ずいぶん飛躍した発想なこと。

でも、それだけみそバタコーンが

おいしかったんだろう。

「おいしかった？」

と聞くと

「うまかったな～

あれは・・・！！

いままでとんこつが一番って
思ってたけどさ。。
いや、今でもそう思ってるんだけどさ。。

あのみそバタコーンは
別格だな、別格。うん」

宮下さんは一人で納得してる。

ラーメン食べながら

二人で一緒に餃子と
チャーハンも分け合って食べた。

「俺、よく食う女って好きなんだ」

えっ・・・また好きって・・・

でも、よく食うって、私ほめられてるの。
喜んでいいの？

ちょっと微妙な気分。

外に出ると
冬の空気が冷たい。

でもラーメンであったまった

体が
ほてった心もやさしく
なでてくれる。

また宮下さんの背中に顔をうずめて
走る。

宮下さんのにおい。

私だけが知ってる。

今、この瞬間の宮下さんのにおい。

このままずっと
背中の鼓動を
感じていたい。

あふれる想い

部屋に一人でいると

さみしさがこみあげてくる。

電話したいな・・・

電話したいな。

もう帰ったころかな。

30分たった。

もう家についてるだろうな。

電話しようかな。

でも、ウザイ女だって

思われたくない。

それに、男の人って

狩猟本能があるらしいから、

追いかけたらダメらしいし。

だけど、だけど・・・

自分の思いをぶつけるのって

そんなにダメかな。

好きなら好きでいいじゃん。

赤名リカのように。

ストレートにガンガン自分を出せたら。

嫌われるのが嫌って

自分を押し隠したり、

計算したり。

そんなのしんどいじゃん。

電話しよう。。

電話しよう。。

やっぱりダメ。

電話したい。

あ〜こうゆうとき、

ドラマだったら

ちょう〜ど

待ってましたとばかりに

緑のランプが点滅したりするんだよね。

でも。

私のケイタイ、いくら待っても

点滅しない。

壊れてるんじゃないの？

試しにいろんなボタン押したり、

電池パックまで確かめた。

1回だけ鳴らしてみよかな・・・

そしたら着歴見てかけてきてくれるはず。

でも、かかってこなかったら・・・？

メールにしようか。

あ～ダメダメ。

メールの返信くるまで

ず～っと

モヤモヤ抱えたまま待たないといけない。

宮下さんって

あんまりメールとか

マメじゃないからな。

でも、マメな男の人と

そうでない人。どっちがいいか。っていうと？

自分自身にとっては

マメな人がいい。

でも、マメな男の人はきっとモテる人。

モテないひとのほうがいい。

でも、モテないひとって

それだけ魅力がないってことじゃん？

いや、魅力はあるけど、マメでない人・・・

あ～もうわからんくなってきた！

なんで

こんなことに悩まないといけないんだろ。

もう宮下さんのことで

頭先从足先まで

いっばいだよ。

宮下さんへの思いで

もう心がはりさけそう。

胸が苦しい。苦しい。

はりさけそう。

私は

宮下さんへの

思いがあふれて

それで自分が壊れてしまわないよう

思いがあふれ出ないように、

ベッドにうつぶせになった。

髪の毛触ってほしい

「昨日・・・ほんとは

電話待ってたんだ」

ついに言ってしまった。

「電話？」

「うん・・・」

「あ～・・・俺、帰ったらフロ入ったら
すぐ寝ちゃったからな」

あっけらかんとしてる
宮下さん。

やっぱり・・・

ココは、これ以上

追求しないようにしよう。

あわてて話題を変える。

「あ、あのさ～・・・

今度どっか行こうよ」

「そうだな。

USJとか行こうか」

「えっ?! USJ?!」

行きたい。行きたい！！

私、お弁当作って行くよ」

「バカだな～
USJで弁当食ってるやついねーよ。

弁当なんか持ち込み禁止なんじゃないの」

そっか～・・・

お弁当なんて作るの得意じゃないのに、
つい
いいこぶりっこしちゃったら
このザマだよ。

だけど、本当だったら

「宮下さんに私の作ったお弁当食べてほしかった～」

なんて可愛く言えたら最高なのにな。

そんなこともできない私。

「また今度弁当持っていけるとこ、
行こうよ」

宮下さんは
私の頭に
手を置いて、
いいこいいこ
するようにヨシヨシしてくれた。

頭なでてもらうなんて

小さいころに親戚のおじさんに
なでてもらったきり、
何十年ぶりだろ。

大切にされてる、って
うれしいな。

「可愛いよな。ミルミルって」

宮下さん
私の気持ちに気づいてくれたみたい。

私のこと、
どこかの
乳酸菌飲料みたいに
呼んでくれた。

私も、
宮下さんのこと、
特別な名前呼んでみたい。

誰も呼んでない
私だけの呼び名で。

USJは

すっかりクリスマスムードいっぱい。

イルミネーションがとってもきれい。

こんなところを

宮りんと一緒に歩けるなんて・・・

そうだ、

宮下さんのこと

宮りんって

呼ぼう。

ふとした思いつきだった。

「あのね・・・宮下さん」

「ん？」

あ～やっぱり

ん？って言う時の顔が好きだな～

って思った。

「宮下さんのこと、

なんて呼んだらいいかな？」

「なんでもいいよ。

男友達は宮下とか呼び捨てだけど」

「え～・・・私、男友達？」

ハハ・・・笑ってる。

「あのね・・・私だけが呼ぶ呼び方が
いいな～」

「どんなの」

「宮りん、とか。宮ちゃんでもいいけど。」

「どっちでもいいよ。ほら」

宮りんは
手を差し出した。

その手を私はそっと握り返した。

その手はそのうち
指と指をからめあわすカップルつなぎになった。

ひじまで
からまっているし。

幸せだった。

夜の公園

マウイでのバイトが終わって

公園で

二人でブランコに乗った。

「今日のアボカドバーガー、おいしそうだったよね～」

今日から新メニューに加わった

アボカドバーガー、

トマトとレタスが

加わって

特製マウイソースも

たっぷりかかって

ほんとおいしそうだった。

「俺も～

作りながら、

食べてみたくなかったよ」

「ほんとはちょっと食べたでしょ」

「・・・ん・・・ちよっとな」

ふいに

宮りんが

ブランコ降りて

私の後ろに回った。

私の背中を押してくれる。

なんだか、こんなことって
小さいころのブランコ遊び以来。

「ちょっと帽子貸して」

宮りんが
私の帽子をとってかぶった。

「ミルミルっていっつも
帽子かぶってるよな～」

「うん」

「帽子好き？」

「ん～・・・なんだからね～・・・
なんとなくかぶりはじめたんだけど、
そうすると
抜けられなくなって」

「抜けられない、って何！」

「ハハ・・・なんだろ～」

「今度一緒に帽子買いにいこ！！」

「えっ?!」

「おそろいの帽子」

ブランコがとまった。

宮りんが
ぶらんこの鎖を持って
無理やり止めたのだ。

私はあわてて
足を突っ張った。

そんな～

こんなことってある～？

あすなろ抱きだった。

憧れの。

宮リンのバイクの後ろにのって
帽子専門店アシッドスタイルに行った。
ここは郊外にある「ハイネショッピングモール」の
中にある。

このハイネショッピングモールは
画期的である。
このショッピングモールができてから
私たちの生活は激変したといってもいい。
なにしろ、
ちょっとしたブランド物の洋服やバッグだって買えるし、
日用品や生活雑貨品、
ほとんどのものがここで揃い、
ボーリング場や釣り堀まであって、レジャー気分も味わえる。

でも今日は
帽子だ。
はじめて一緒に買い物に来た。
宮りんは「これ、いいんじゃない？」と
メジャーのデザインがはいた野球帽をかぶる。

「え～っ・・・野球帽のペアはちょっときついよ～」

と、私はキャスケットとハンチング帽の
間をとったような
ちょっと変わったデザインのものを手に取った。

「これなんかいいんじゃない～？」
「あ～これか・・・」
色とデザインも全く同じではなく、
モザイク模様がモチーフになっていて
ひとつは

黄色の毛糸が編みこまれていて、あとは布地で
薄い青のチェックやオレンジの模様。
もう一つは茶色がベースの感じで、
薄いグレーや黒の水玉なんかもおしゃれに入ってる。

宮りんは得意になって
帽子をかぶった姿を鏡に映してる。

「ミルはこっちね」と
黄色の毛糸が編みこまれてるほうをかぶせてくれた。
「あ！いーんじゃない、これ」

そしてお互いが相手の帽子を
レジにもっていき、
相手の分を支払った。
店員さんはなんて思っただろう。

カップルっぽいのに、ふたつ一緒に買えばいいのに・・・と
思われたらどうか。
それとも互いのものをプレゼントしてるんだな、って
見透かされたらどうか。

でも、そんなことはどっちだっていい。

大切なのは
お互いが相手のために使った4095円。

この4095円は価値のある4095円。

自分で自分のものを買ったことと同じだけど、
違う。

相手のために使った4095円。

しかも、そのお金は
二人とも、

自分で働いて得たお金を使ったというところにも
私は満足していた。

冬の海

冬の海は寒かった。

私と宮りんは

この間約束した

「お弁当を食べれるところ」

というところで

海辺をチョイスした。

しかし、

冬の海は寒かった。

おそろいの帽子をかぶっていた。

二人で寒い中、

冷たくなったお弁当をつついた。

「やっぱりちょっと

今日は無謀だったね～」

「そうだな～ラーメン食いてえー」

またラーメン？

こんなところにきても？

私のお弁当があるのに・・・

ちょっと私はムッとなった。

でも、そんなことは

おくびにも出さない。

「コーヒーあるよ」

HOTコーヒーは持ってきていた。

それを二人ですすりながら
ふと気付いた。

「あんなところに
たい焼き屋さんあるよ。」

浜辺に屋台のたい焼き屋さんが
あった。

「買いに行こう！！」
食べることはすぐに
意気投合する
私と宮ちゃん。

ひとつづつ、
袋にたい焼き包んでもらって持つ。

「ねーねー
たい焼きってどっから食べる？」

「なんだよ～たいやき占い？」

「まあね」

「んー俺は頭っからかな。
ガブっと」

「え～なんだか残酷・・・」

「ミルは？」

「私・・・？」

私は半分に割っておなかから食べるかな？」

「え＝っ！！

切腹かよお＝

そっちのほうが、残酷う～」

「だってそうしたら

あんこがまちがいなく食べれるでしょ。

頭やしっぽからだとあんこが入ってない

たいやき、たまにあるじゃん～」

「なあ～んか、いやしいな～」

「いやしくないよ。

あんこと皮の絶妙のコンビネーションを
味わってこそ、たい焼きのだいご味だよ。

皮だけ・・・とか、あんこが

余分にあまって・・・とか

そんなの邪道だよ」

「ほお～そうですか。

で、たい焼き占い師さん。

頭から食べる人って

どうゆう性格なの？」

「あ、えっとね。

かなり強気。

俺にコワイものなんかないぜ！とか、

そうゆう感じ」

「あ、当たってる、当たってる～

強気じゃないと

この世界で生き残れないよ。

で、腹切りたいやき食べるおねえさんは
どんな性格？」

「あ～・・・」

私は

あんこと皮のコラボレーションを
口の中いっぱいにしてながら
考えた。

「石橋たたいて渡る・・・みたいな。
まちがいのないよう、失敗のないよう・・・
慎重な性格」

「え～っ？

ぜんっぜん見えん！！」

「なんでよお～！！
結構そうだよ。宮ちゃん、まだほんとの私、
知らないね」

「・・・うん。。知らない・・・」

なんだか宮ちゃんが
急にしんみりとなった表情になった。

えっ？どしたの？

私は下から宮りんの顔をのぞきこんだ。

「つかまえた！！」

突然宮りんに背中から手をまわされ
抱きかかえられる格好になった。

「お姫様、もうつかまえましたよ。」

宮ちゃんと

私は

はじめてキスをした。

「ミル～！！好きだよお＝！！」

宮ちゃんは海にむかって絶叫した。

「宮りん～！！

私も好きだよお～！！」

私も海にむかって絶叫した。

テトラポットの上で

釣りをしている

おじさんが

私たちを見ていた。

やりたいこと

「ねーねーやりたいことあるんだ、私」

唐突に私は提案した。

「何？もしかして・・・？」

宮ちゃんは

さぐるような目を見た。

「違うよ～」

あわてて手を振って否定した。

「何がちがうんだよお～」

笑ってる、宮ちゃん。

「あのね、

この波打ち際のおっちと

こっちからお互い走るってやつ」

「一昔前の青春ドラマじゃないの～

ホントにミルって平成生まれ？」

「いいから、いいから」

海岸の一番向こうまで行ってしまった宮ちゃん。

ちょっと

さみしくなった。

「宮ちゃーん！！」

大声で叫んで私は走った。

走って走って走って走った。

でも、砂浜って
思うように走れない。

野球部のトレーニングみたい。

「ミルー！！」

宮ちゃんも激走してきた。

さすが宮ちゃんは肉体派、スポーツマン。

あっというまに
私のところに来てくれた。

抱っこしてもらって
ドラマのようにぐるぐる
回してもらおう。

「ミル・・・」

宮ちゃんが自分の
ジャケットを片袖だけ脱いで
私の肩にかけてくれた。

宮ちゃんに
すっぽり包まれてるみたい。

それでも、
冬の海はまだ寒い。

「寒いね・・・」

思わず声に出してしまった。

「寒いね、と話しかければ寒いねと・・・」

宮ちゃんが詠んだ。

「答える人のいる暖かさっ！」

「正解！！」

宮ちゃんは私の両ほほを

はさんで優しくなでてくれた。

また唇を合わせた。

今度は長い長いキスだった。

「それでさ～・・・

勝負下着ってあるじゃん。」

「うんうん・・・」

昼下がりのカフェテラス。

同じゼミの琴美と
話していた。

「今、三択に絞り込んでるんだけど。

ショッキングピンクに黒のレースつき。

または、アニマル柄。一応ヒョウなんだけど。

それか、やっぱりクリスマスだから
赤かな～・・・とか
思っ。

今、クリスマス下着なんてゆうのも売ってて、
ヒイラギまであしらってるのもあったんだよ」

「ダメだよ～ミル。

何いってんの。

男はさ～純真無垢が好きなんだよ。

結局、白、白！！

もう、男は下着は白。」

「えっ・・・そうなんだ・・・」

「そうそう・・・女の子はいろいろ
可愛いのが好きだったり、ゴテゴテ
飾りがついてるのもいいな、なんて
思ったりするけど、
女がいいとおもうのと、
男のそれとは違うんだよ」

「そうなの。よく知ってるね、琴ちゃん」

「化粧なんかでもそうだよ。

女の子はつけまつげとか
大好きでマスカラなんか常識だけど、
男からしたら何、あれって感じなんだって。
もう、ネイルアートに関してはやめてくれ～！！
っておもってるよ。」

「そうなの。私つけまつげが面倒で、
まつげのエクステとか一度やってみたかったんだけど・・・」

「まあ、男は結構鈍感だから
さりげなく自然な感じでやってる分には
気付かないけどね。
浜田ブリトニーちゃんみたいなのはダメだよ」

「はぁ・・・っで、あの下着なんだけど
白ってどうゆうの？」

「あ！アンタいくら白でもグンゼのへそ上パンツとか
そうゆうのダメだよ」

「いや・・・それはいくらなんでも・・・」

「まあ～そうだね～・・・
白のレース付きくらいだったら
いいかな。レースにもあまり関心ないんだけどね。
なんせ、白に純真さ、けがれなき潔癖さ、みたいな
幻想抱いてるから」

「そうなんだ・・・ちょっとわかんないから
今度一緒にお店行って選んでくれる？」

「いいよ・・・あ、でもさ。
アンタそれより・・・」

琴美は急に声をひそめた。

「ちゃんと避妊しなよ」

「えっ・・・?!」

「避妊だよ、ヒニン。ちゃんと持ってんの」

「持ってる・・・て・・・？」

「もっとかないとダメだよ。レディーの常識。」

それとも、まさかピル飲んでるの？」

「え～・・・そんなの、飲んでないよ」

「でしょ。ちゃんと言うんだよ。」

つけてね、って」

「そんな・・・すごい経験者みたいじゃん」

「ダメだよ。。そんなんじゃ。
宮下さんがつけてくれそうな雰囲気じゃなかったら
途中で止めてでもキチンと言うこと」

「はぁ・・・でも、持ってなかったら？」

「そこだよ。だから聞いたんじゃん。

あ、持ってないわ、俺。じゃすまないよ。

今脱いだパンツをもいっかい履いて
近くのコンビニにでも買いに走って行ってもらうか」

「それはね～・・・」

「そうでしょ、ムード台無しじゃん。
ま、ラブホだったら売ってるけど。
あ、でもラブホ？フツアのシティホテル？」

「えっ・・・ちょっと・・・わかんない・・・」

本当は宮ちゃんから
クリスマスには
リッツホテルを予約してるから、と
言われてるんだけど、それは秘密だ。

「とにかく
ちゃんと持って行きなよ。
私なんかほら、こんな風に・・・」

といって
琴ちゃんは化粧ポーチから
小さいケースを取り出した。

「何、それ？」

ビニール製で、
中にはカードケースのように
10枚くらい入るように
蛇腹になっている。

「え〜っ。そんなのあるの？」

私は目を丸くした。

「そうだよ。これだと、デザインも
パステルカラーで
可愛くってわかんないでしょ。
もし、口紅出すときにおっことしたりしても
大丈夫。」

「へ〜。。そんなの、どこで売ってるの？
どこで買ったの、琴ちゃん」

「ラブホ。今なんでも売ってるんだよ〜

ラブホの自販機の隣に

と一緒に携帯用のケースもどうですか。
って書いて売ってあった」

「と一緒に・・・昔のマクドの
ポテトも一緒に・・・のノリだね」

「そ。今香りもいろいろあるんだよ〜

あ、もうミルに1個渡しとこっか？

ほんとに持って行くかどうか不安だから。

何がいい。いちごとか

オレンジとか。

あ、でもハワイアン系だよね。

パッションフルーツとかマンゴーもあるよ。

あ、ドラゴンフルーツとか・・・」

私は再び目がまん丸になった。

おっぱいゆらし

その日から私は この間 テレビ『どや顔！サミット』でみた
おっぱいはずし おっぱいゆらしに挑戦した。

お風呂でチャレンジ！

男の人って 絶対おっぱい おっきいほうが好きだもんね。

なんだかんだいって

グラビアアイドルが みーんな そろいもそろって おっぱいおっきなひとばかりというのが 揺るがぬ証拠だ。

もう

しょうがないよね。

だって おっぱいは 地球を救う！だから。

それにしても… お風呂入っていると

絶対電話が気になる。 何故かなってる気がする。

あー今も…！ 私は あわてて裸で飛び出し

脱衣所に置いてある ケイタイに飛び付いた。 こんな姿、宮ちゃんに見られたら…

シンとしているケイタイ。 何もなっていない。

あーどうして 鳴ったように 思うんだろ。

でも良かった。 何がよかったんだろ？

こんな姿見られてなくて。

…て、どちらにしても 見られてるわけないよ。 裸で出てきた姿や 浴室で

おっぱいゆらしに 励むナイショの姿。

好きになったら負け

「宮ちゃん～クリスマスプレゼント、

何がいい？」

私たちは

またハイネショッピングモールを

歩いていた。

「ん～・・・そうだな！！

ミル！！」

「えっ？」

「ミルの全身にチョコレートか

生クリームたっぷり塗って

赤いリボンかけて

はい、どうぞ。。。てゆーの

やってくれたら。」

「なによ～それっ！！」

笑ってる、宮さん。

「じゃさ、ミルは何欲しい？」

「ん～そうだな。

百万円の札束

いっぱいぶらさがってる

クリスマスツリー！」

「おおっ！それもい～ねえ。」

喜んでる、宮さん。

肉欲と金銭欲にまみれた
カップル。

こんなのでもいいの～

「宮ちゃん、それじゃあ
ただの野獣だよ、野獣」

「そうだよ。
男は誰でも狼なんだよお～」

ガオーッと狼フェイスで近づいてくる宮ちゃん。

あ～
やっぱり・・・
宮ちゃんも狼だったのか。。

でも、仕方ないよな。

それでも

嫌いになんかならない。

それでも好きなんだから
仕方ない。

好きになったほうが負けだよな。

今、

私絶対宮ちゃんに負けてる気がする。

私のほうが絶対宮ちゃんへの想い
強いような気がする。

宮ちゃんは
私のこと
好きでいてくれると思うけど、

なあ～んか、
それ以外にも

何か夢を持っていそうな
気がするんだ。
それが何か、って
私にはわからないけど。

あ～
好きになるってしんどいな～

楽しいけどしんどいんだよね～

ホテルのロビーに入るとクリスマスムード一色だった。
天井まである大きなクリスマスツリーが飾られていて
そのまえで握手するとツリーが点灯するというしかけ。
たくさんのカップルがツリーの前で
握手している。握手だけでいいのにもう勝手に抱き合っちゃってるカップルもいる。
若いひとだけじゃなく
夫婦？じゃないよな～ どうみても..
といったかんじの不倫の香りがプンプンする中高年カップルもいる。
お姉系と
ニューハーフのカップル。マッチョマンと女子高生風。
ほんとの世は恋ざかり。
そして私と宮ちゃんもシッカリ見つめあって握手した。
『好きだよ。ミル』
『宮ちゃん..』
そして私達もやっぱり抱き合ってしまった。人目なんか
全然気にならない。自分たちだけの世界の私。

深い深い夜の海へ

部屋に入って

ウェルカムドリンクの
シャンパンで乾杯した。

25階からの

夜景がキレイ。

窓際にたって

ずっと夜の景色を見ていた。

そっと宮下さんが
私の肩に手を置いた。

ミル・・・

うわ！！またあすなろ抱き？

もうないか。。

「ミルの生まれた1991年のヴィンテージワインを
注文してるんだ」

えっ？・・・本当・・・？

しばらくすると

ボーイさんが
運んできてくれた。

初めて飲んだワイン。

でも・・・これって

おいしいのかな？

ワインビギナーだから
わかんないけど、

でもほっぺがポツと
赤くなる。

「ミル・・・これ・・・」

そっと差し出された
こんな可愛いピンクの宝石箱。



えっ・・・？何・・・これ・・・？



あけると

こんなに可愛い指輪が入っていた。

「えーっ！！宮りん。これ・・・くれるの？」

ピンキーリングだった。

宮ちゃんがそっと私の左手の

小指にはめてくれた。

「宝石類を一切身につけなかった

あのオードリーヘップバーンも

ピンキーリングだけは

つけてたらしいよ。

ピンキーリングは幸せになれるんだって。」

「え〜っ！！そうなんだ・・・

だけどさ、これ

私の誕生石のブルームーンストーンだよ。

よく見つけてくれたね」

「そうだよ。それと

俺の誕生石のガーネットとのコンビ。

最強だろ」

「・・・うん。すごい可愛い。

大事にするね」

そして

私たちは夜の海に落ちていった。

隣に寝ていた

目覚めると

見たこともない知らない天井が

真上にあった。

えっ。。。ここはどこ・・・？

ふと横を見ると宮ちゃんが

幼稚園児のような顔をして寝ていた。

そっか～・・・

私・・・ついに・・・

ほっぺをツンツンしてやった。

まだ起きない・・・

とりあえず、シャワーを浴びる。

出てくると宮ちゃんも起きてきていた。

なぜか、

ジョギングウェアに着替えてる。

「ちょっと走ってくる！ランニング」

えっ？何それ・・・

「ミルも走る？」

いや・・・そ、そ、それは・・・

勢いよく飛び出して行った宮りん。

どうなってんのお～

ほんと、スポーツ少年。

朝から元気あふれてるといふか、

私のこの豊満な肉体には

キョーミないのか？

まっ・・・

そこがいいのかな。

でも、ちょっと

朝からイチャイチャしたかったな～

お昼はケンタで！

チェックアウトして

外に出ると

冷たい空気が

頬をさす。

「さむ～！！」

思わず縮こまる。

「ほら」

宮ちゃんが手を差し伸べてくれた。

そっつつなぐ。

「え～っ！！なんで手袋してんの？」

あっ・・・そっか・・・

手袋したままつかないじゃった。

手をつなぐ右手だけは

手袋をはずした。

「こんなに寒かったらさ～・・・

いっそ、雪が降ってくれたらいいのにな～」

「ホワイトクリスマス・・・だろ？」

「そーそー！！」

よく知ってるね」

「永遠の定番だもんな～

♪雨は夜更け過ぎにい～」

・ ・ ちょっと音程ずれてる。宮ちゃん。

「でもさあ～

よっくこんな寒い中、朝から走ったね」

「そりゃーねー！！

気合だよ、気合！！」

「ほんと、すごいわ・ ・ 宮ちゃん」

ホテルから駅までの繁華街の道を

いろんなお店

出たり入ったり、

散策しながら

歩いた。

「あ！ケンタッキーあるよ。

入ろ！！」

宮ちゃんが

目を輝かせた。

二人で

「食べくらべペアパック」というのを

注文した。

レッドホットチキンと

オリジナルが2個ずつ
入ってる。

「やっぱ辛いほうがおいしいかな〜？」

「いや・・・ケンタはオーソドックスなのが一番さ！」
と
ガツガツむさぼり食べてる
宮ちゃん。

チキン以外にも
チキンフィレサンドとクリスピー、そして
ビスケットまで
注文してる。

ポテトは一緒に食べた。

「チキンはケンタだけど、
ポテトはやっぱマクドだよね〜？」

「うん・・・そうだな・・・」
といいながら
心にあらずといった風情で
延々とムシャムシャ食べる宮ちゃん。

でも、私は
そんな宮ちゃんの食欲がうれしかった。

「それはちょっと

ショックだったね～」

クリスマスの朝にジョギング行ってしまった

宮ちゃんの話聞いて

琴美が言った。

「そうでしょ。ちょっと考えらんないでしょ・・・」

「ん～。。まあね。

スポーツマンだからね～・・・

肉食獣に変わりはないんだろっけど、

なんせ、彼らって試合の前になると

ストイックに肉欲抑えるためにも、

もうそんなこと考えらんない！！てくらい

ひたすら練習する、っていうらしいから」

「でも、もう引退してるよお～」

「まあ、そういう信念みたいなのが

はりついてるっていうか、

自分の中にもう

スポーツが生活の中に溶け込んでるから

もう、どんな時でも

鍛えないと気が済まないんだろっね」

「はあ～・・・でも、

女子の気持ちってわかんないんだろっね」

ちょっと私はさみしくなった。

「あ～わかんない、わかんない。
もう自分のことで必死だから。
だけど、それってミルのことをどうこう、って
いうのとはまた別だよ。これが不思議なことに」

「そうなんだ・・・」

「愛されてる、って思ったでしょ？
どうだった？」

「うん・・・まあ・・・」

「ちゃんとうまくいった？」

「うまくって・・・」

琴ちゃんってすぐストレートに聞いてくるんだから・・・

「宮下さんに対して気持ち変わった？
ジョギング行かれて嫌いになった？」

「いや・・・それは・・・ない・・・」

「そうでしょ、っで？
どうだったんですか～
ミルミルちゃん」

冷やかすように琴ちゃんは言った。

「ますます好きになった」

「でしょー！！」

琴美は自分のことのようにうれしそうだ。

指輪にキス

朝起きたら

指輪を

はめる。

「宮りん、おはよ」

といって

チュッとする。

講義の間や、
満員電車の中。

ちょっとイライラしたときも

指輪の輝きや、

光を見てるだけで

気持ちがすっとする。

夜寝る前も

「宮下さん、おやすみ。

今日もありがとう」

といって

指輪にキス。

そうして

またピンクの小箱に

リングをなおす。

あ～

私って

可愛い～💕

と自己満足。

乙女な私。

『あ、もしもし？みやちゃん？私で一す！誰だと思う？』

『誰って…もう名前出てるし…』

『だーかーら～…』

誰でしょう？』

『ミルちゃん！』

仕方なく付き合っただけの宮ちゃん。

でもそんなことには全くめげずに自分のペースを貫く私。

『せいかーい！…ねーねー今何してた？』

『何って…ラーメン食ってた…』

『またラーメン？！』

えっ今日大晦日だったら おそばじゃないの？年越しソバ』

『いや～ソバはね～』

まあそばもいーんだけどね。やっぱラーメンだよ』 『じゃあ年越しラーメン？ラーメンにえび天のっかってる？』

『まさか…ラーメンとえび天は合わないっしょ』

『そっか…』

なんとなく話が途切れて

次の話の糸口を見つけるのに少し空白があいた。ちょっと焦ってくる。と同時になんだか切ない気持ちが込み上げてくる。

『なんかもう今年も終わりだね～』

『そう…だな…』 『今年1年どうだった？』 『そうだな…』

今年は、バイトも楽しかったしミルと出会えて良かったよ』

『ほんとにい？ほんとにほんとにそう思ってる？』

『うん。ほんとにほんとにそう思ってる』

『良かった～私も宮ちゃんのこと』

スッゴイ好きだよ！』 『俺もミルのことすんげー好きだよっ！』

『ホント！この夜空が突き抜けるくらい？』 『うん。宇宙船でいったら帰ってこれないくらい』 きゃは！

恋人同士のベタな会話を楽しんだあと また沈黙が訪れた。

ふと時計見ると0時2分前。

『みやちゃん…』

あと2分で今年終わるよ』

『そっだな…今年もいろいろお世話になりました』 『何改まって〜』

私はふと思い付き 『ねー宮ちゃん。カウントダウンしよっか〜』

『おっいいね!』

10…9…8…7…

0!! 元旦だ〜

『明けましておめでとう!』

『おめでとう、ミル』 『今年もよろしくね。宮ちゃん』

『こっちこそ〜おてやわらかに。ミル姫』

『じゃあもう今日だよね。待ち合わせ! 10時に駅で』

『ん!』

私達は元旦に初詣にいこうと約束していた。神社にバイクはさすがにきついだろうと
ここはおとなしく

電車で行くことにしたのである。

『じゃあね。いったんバイバイ』

『おやすみ…』

私は

胸がいっぱいになった。

またあふれる思いがこぼれないよううつぶせになって寝た。

初詣デート

朝、おせちと

お雑煮で家族でお正月を

お祝いしたら、

もうあとは宮ちゃんとの時間。

ていうか、

もうお雑煮食べてるときから

頭の中は

「何着ていこう～」

と洋服のことで頭がいっぱい。

ほんとに女の子って

いつもいつも

洋服洋服。

本当に

面倒。

でもそれが楽しいんだけどね。

私的には

ショーパンにブーツで生足でいきたいんだけども、

女の子が大好きなブーツ、

男の人って

ブーツが好きではない。

以前ブーツはいてると

プロレスラーかよ、とか

SMプレイ趣味？なんて
とんでもないこと言われたり。

それに生足というのも
イマイチ低評価。

真夏に
ストッキングはNGだけど、

冬空に生足も

「見てるだけでトリハダたつよ～」

「なんでほりだしてんのぉ？」

という
真冬の寒さにも負けずに
おしゃれ心を楽しむ女子の気持ちが
まったく伝わらない。

それにショールパンそのものも

あまり好きではないはず。

なので、ここは思い切って
ミニスカートにしてみた。

だけど、ティアードは甘過ぎてダメ。

清楚に
紺色のプリーツスカートにしてみた。

そして
フワフワティペットつきの
白のセーター。

足元はニーハイソックスにしよう。

だけど、コートくらい
元旦だからめでたく
赤でいきたいな～

と思い切って真っ赤なポンチョをセレクト。

あ～
でもやっぱりハイソックスだけだと
チト寒い。

フワフワモコモコの
レッグウォーマー。・・・て
ありかな？

ちょっと一抹の不安がよぎったが、
まっ、いっか。

2012年。最初のデートはこれだっ！

恋愛必勝大作戦

待ち合わせは10時だけど、

15分前に着くよう家を出た。

今日はこないだテレビで見た

「はるな愛のオトコ心をつかまえる
必勝法」を
実践するのだ。

待ち合わせの場所についても
その場では待たず、

少し離れたところから

彼の動向を
陰からうかがう。

彼氏が到着し、
待ち合わせの時間が少し過ぎ、
彼が時計やケイタイなどチェックしはじめ

時間を気にし始めたところ

背後からゆ〜っくりと
近づき、
後ろから
「だぁ〜れだっ！！」

と手のひらで目隠しをする。

という

作戦。

あ～こんな単純な法則で

男心が

ワシづかみにできるなんて・・・！

オトコって

なんて単純！！

私はニヤニヤしながら

待ち合わせの場所から

2メートルほど離れた柱の陰から

ひたすら宮ちゃん出現を待った。

ところが・・・

待ち合わせの時間を5分すぎ・・・

10分過ぎても

なかなか宮ちゃんは現れない。

え～・・・おかしいな～・・・

待ち合わせ、ここじゃなかったかな～？

時間は10時で間違いはないし。。

キョロキョロあたりを

見回してみても

宮ちゃんらしき人は誰もいない。

やっぱりここじゃなかったんだ・・

少し移動して
あたりを探す。

いない・・いない・・

だんだん迷子になっていくような

不安な気持ちになっていく。

昔スーパーで
お母さんとはぐれた
時のような気持ち。

改札で待ってれば間違いない。

結局改札口で
宮りんの登場を待つ。

次の電車・・

やっぱり出てこない。。

こうゆうときのケイタイだけど。。

着歴もメールも
きてない・・

私からかけよっか・・

そしたら

私のこの恋愛必勝大作戦は
どうなるのだ。

しかし、このままだと
会えないままだ。

あ～葛藤。

不安と迷いでいっぱい瞬間。

肩をポンと

叩かれた。

「ミル！」

私は万引きが見つかった小学生のように

ビクッとなった。

「宮ちゃん！！」

「こんなとこで何してんの。
待ち合わせの場所いなかったから探したよ～」

「え～っ・・・こっちこそ探したんだよ」

「なあ～んか捨てられた子猫みたいな
顔してんな～

じゃ、行こ！！」

無邪気に笑う宮ちゃん。

宮ちゃんは野生派だから
無人島でも生きてけるよ・・・

あ～新年から
恋愛作戦失敗か～

私って結局こうだよな・・・

でもでも・・・

気を取り直して宮ちゃんと

腕を組んで歩く。

神社におまいり

境内の前に

二人並んで立つ。

「今年も宮りんと

ずっと一緒に過ごせますように・・・」

チラと薄目をあけて

隣を見る。

まだ目をつぶったまま

真剣に何かを

祈ってる宮ちゃん。

また私もあわてて目をつぶる。

もう・・・いいかな？

ゆっくり目をあけた。

なんだか真剣まなざしそのまま

まっすぐ

前を向いてる宮ちゃん。

どうしたんだろ？

歩きだしてしばらくして

「ね。さっき何をお願いしてたの？」

聞いてみた。

「そんなの・・・秘密だよ～
ミルは・・・？」

「私は・・・決まってるでしょ。」

でも、私は知っていた。

宮ちゃんが
500円玉を2枚だして
おさい銭箱にいれていたのを。

あれはきっと
私と宮ちゃんとの二人分だ。

二人分のお願いをきっとしてくれてるはず。。

と勝手に想像して喜んでる。

神社のふるまいである
あつい煎茶をいただいた。

今年もいっぱい
いいことがありますように・・・

「・・・えっ・・・？」

何・・・？何・・・？」

宮ちゃんが私の耳元で
そっとささやいた。

「もいっかい言って」

「欲情した・・・」

ヨクジョウ・・・て・・・？
え～っ！・・・

なんで？何に・・・？

聞けば私のこの
モフモフな

レグウォーマーに
萌えたらしい。

へえ～・・・
意外だ。。

以前、
キュロットミニを
はいていったときは

「だました」とか
なんかいわれて

激昂されたけども・・・

何がだましなのか

わかるような、わからないような。

で、ブーツはダメといわれたことあるので、

このレグウォーマーも

不評かと思えば

意外なウケのよさ。

ほお～んと

オトコって

わからないね～

もふもふ。

新年早々ラブホ

そんなわけで

新年早々

私たちは

ラブホに入った。

でもすごいね～

どこも、いっぱい。

新年から。

新年だからかな？

3軒目でようやく
たどりついた。

シャワー浴びてると

宮ちゃんが突然入ってきた。

「え～っ・・・なんで
宮ちゃん、はいつてくんのお？」

一瞬ふくれてると

「いいじゃん～」
と
ニヤニヤしてる。

二人で洗いこした。

・・・お母さん、ごめんね。

なぜか

心の中で母に謝った。

でも、恋には勝てないのだ。

浴室から出て

バスローブ羽織ったら、

宮ちゃんが

お姫様だっこして

ベッドまで

運んでくれた。

宮ちゃんとミルの恋愛話

<http://p.booklog.jp/book/42227>

著者：キャンディやぶこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/pinky77/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/42227>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/42227>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.